



TITLE:

無責任なる翻譯の一例

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 無責任なる翻譯の一例. 經濟論叢 1922, 15(6): 927-930

ISSUE DATE:

1922-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127968>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷五十第

行發日一月二十年一十正大

論叢

相續税に於ける特殊累進に就きて

法學博士 神戸正雄

勞農露國の農業

法學博士 河田嗣郎

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず

法學博士 田島錦治

基督教文明の發展概論

法學博士 財部靜治

經濟道と經濟術

法學士 作田莊一

資料

中央市場論并に食料品配給費研究

法學博士 戸田海市

說苑

リストと歴史派經濟學

法學士 山口正太郎

我國の都市及地方に於ける婚姻の統計的觀察

經濟學士 岡崎文規

雜錄

無責任なる翻譯の一例

法學博士 河上肇

原田學士譯ボーリニー經濟學原論

經濟學士 小川福太郎

價格指數に就て

法學士 沙見三郎

附錄 本誌第十五卷總目錄

雜 錄

無責任なる翻譯の一例

河 上 肇

私が大學を卒業した明治三十年代には、翻譯書と言へば必ず役に立たぬものゝやうに考へられてゐた。書肆も譯書といふと其の出版を躊躇する傾向があつた。實質は抄譯でも翻譯でも可いから、兎も角著述といふ名義にして貰ひたい、といふやうな注文をするのが常であつた。

それは何故であつたかと言ふに、それより前に公にされた翻譯書の多くが無責任なものであつて、それを讀んだので何が書いてあるのか能く分らなかつたからである。そんな翻譯書よりも、たとひ實質は翻譯に近かからうと一定の著者が能くものを讀みくだいて、それを自分の議論か説明かのやうに書き下してくれたものゝ方

が、遙に讀書界のため役立つたのであつた。當時の經濟學界は事實歐米の學說を輸入するに忙しかつた。さうして其の事業が學者によつて行はれた。西洋の書物を讀み得るといふことが語學の力のある學者の一特權であつて、その特權を有つことによつて學者は學者としての職分を果すことが出來た。それで洋書といひ洋語といふべきところを、原書とか原語とかいふのが、當時のならはしであつた。原書を讀み原語を知つてゐることが、手頼るべき翻譯者のなかつた時代——しかも智識を世界に求むることの急であつた時代——の學者の一資格であつた。

私共は之を久しく遺憾としてゐたものである。世界に智識を求むことは何時までも必要である、併し其のためには、翻譯書が世間から歡迎さるやうに爲らなければならぬ。さうして其のためには、善い翻譯書が次ぎ／＼に出て、學者が論文を書く場合に外國書を引用する必要などがあれば、安心して何時でも邦譯書の頁を擧げることが出來るやうにならなければならぬ

い。外國人の著作を見ると、自分の國語に譯書のあるものは、大概その譯書を引用してゐるが、日本でも早くさういふ状態になりたいものである。——斯様に考へながら、吾々は爲すことも無くして、今日まで打ち過ぎたものである。

ところが近頃になつて、いろ／＼な經濟書が邦譯されることになり、中には相當の程度まで信賴の出来るものが現れて來た。もし注意深くしてゐたなら、たとひ西洋語を知らなくとも邦譯書だけで、或る程度までの學問が出来るやうになつた。これはまことに喜ばしい事で、もし此の勢が／＼進んだなら、學者は西洋の書物が讀めるといふだけでは、學者としての面目が保てなくなる。學者の主なる職責は、實は西洋の書物の請賣り以外に存すべき筈だから、西洋の書物が讀めるといふことが學者の唯一の資格のやうになつてゐるのは、決して好ましい現象ではないのである。

私は平生斯様に考へてゐるので、善い翻譯書の出ることを何時も非常に歡迎すると同時に、無責任な翻譯書が出ると、そのことが翻譯書一般に對する讀書界の危惧と不信用を惹き起す原因となるかに思つて、何時も顔をしかめるのである。著述ならば何んなつまらぬ著述が出て、それは著者一人の不信用を招くだけであるが、翻譯書のつまらぬものを出されると、それが翻譯書全體に對する不信用を醸すことになりはせぬかと氣遣はれて、私は相當これを氣にやむのである。

最近いろ／＼な翻譯が出るに當つて、遺憾ながら吾々は其等のものゝ中に可なり無責任なものを找出す。私は其の一例として『勞農革命の前途(最近のレーニン論集)』と題する譯書を舉げることが出来る。この書は新生會同人譯としてある。新生會とは如何なる人々の團體であるか、私はそれを知らないが、兎も角個人名義になつてゐないので、私にとりては此の書を以て惡翻譯の見本となし、之に對して相當無遠慮な

ことを申すのに、氣兼ねをしなくて済むのである。

私は此書の八頁に次の如き文句を見出す。

『ドイツ及びロシアは一九一八年に於て、それ自身の國內に社會主義を實現すべき、經濟上、産業上並びに社會的諸條件及び政治的諸條件を包藏したのであつた』。

私はロシアの原文を読むことが出来ないから、確なことは言へないけれど、之を英譯に徴すれば、この一句はドイツ及びロシアは、一九一八年において、一方は社會主義の實現のため必要な經濟的、産業的及び社會的諸條件を具へて只政治的條件を缺いで居り、他方は之が政治的條件を具へたのみで經濟的、産業的及び社會的諸條件は之を缺いでゐた、と言ふ意味のものである。又私は其の一〇頁において次の如き文句を見出す。

『何となれば、現ロシアの經濟的位置から押せば、ロシアは國家資本主義と社會主義——國家的計算並びに支配——の兩者に共通なる状態を経由することなしには發達する事が出来ぬ。『國家社會主義に向つて徐々に進化』する事は、理論上絶対に出來ぬ事で、此事は進化の眞實の道から人々の心を迷

はせる事を意味するもので云々』

英譯がもし間違でなかつたなら、此處の意味は、『それは正に、國家資本主義及び社會主義の兩者に共通なもの——即ち國家的の計算及び管理——を経過することなしにロシア現時の經濟的位置から前進することが不可能だからである。『國家資本主義へ發展する』といふことを何か怪しからぬことのやうに言つて他を恐ろかし自ら驚くのは絶對的な理論的愚昧である、云々』といふほどのことであらう。『國家社會主義に向つて徐々に進化する事は理論上絶対に出來ぬ事で云々』の譯は、可なり無責任な翻譯だと思はれる。又一二頁にある

『國家獨占資本主義は、社會主義の實現に對して、最も完全なる物質的準備を己のへたもので、其を關である。それは社會主義と呼ばれるものに對する歴史的の第一歩であつて、それと社會主義との間には何等の中間階段がないのである』

といふ一句も、之を英譯から重譯すれば、『國家獨占的の資本主義は社會主義に對する最も完全な物質的準備である、それは社會主義への玄關である、それは歴史といふ梯子の階段の一つで

あつて、それと社會主義と稱せらるゝ階段との間に介在してゐる階段はない』といふ意味のものになる。

斯様な些細なことを列擧すれば殆ど際限ないが、私は最後に次の一例を引用して、此の翻譯が如何に無責任なものであるかの、今一つの例證としやうと思ふ。同書第二九頁には

『次に吾人は讓歩と國家資本主義の形式の共同を比較しやう。共同は小工業、一部は父家長的なる工業を基礎となせるに、讓歩は大なる機械工業を基礎とするものである云々』

とあるが、その第一句は、恐らく『吾々をして國家資本主義の一形態としての利權割讓（資本家に對して行はるべき企業私營の特許）と消費組合とを比較せしめよ』といふほどの意味であらう。この譯書は『ロシア革命の盲目的讚美以外の何物をも有せぬ青年諸氏の妄見を打破する必要を感じ』て公にされたものださうだが、組合を共同と譯出するやうな手際で『果して青年諸氏の妄見』が打破されるか何うか、少し覺束なく思はれる。自分自身も屢々誤譯を重ねてゐ

るのに、それは棚に上げておいて、何時も他人の仕事のあら探しばかりやるやうだが、近頃必要があつて此の譯本を開いて見ると、到る所に可なり無責任な譯がしてあつて、譯者自身が果して原著者の言はんとする所を理解して居られるか否かさへ甚だ怪まれて來たので、此の一文を書く氣になつた。固より特に新生會同人を責めんとするの意はない、たゞ翻譯には總て相當の責任を持つて貰ひたいと云ふことを、譯者並びに出版者に向つて一般的に希望するのが、私の本來の趣意である。